

広瀬 敏通 (ホールアース自然学校代表)

Theme Talk エコツアー最大の魅力は「人との出会い」。観光をきっかけに、知恵を使って地域を活性化させよう。

■「観光」とは、光りモノに触れることによって浄化され、力を得ること

里山を舞台に「観光」と「環境教育」を考えていく上で、議論の叩き台になる材料を二、三お話しいたします。

私のプロフィールとしては、こういうものもあるんです。「ホールアース設立者にして代表。冒険、探険、世界の辺境を愛する。日本の自然学校の草分けであり、自然体験型環境教育の第一人者。多くの公職を持つが、スタンスは自由人で視線はつねに前に向く。チャレンジスピリットは錆びていない。骨折多数。熱帯の熱病、破傷風、ツツガムシ、マムシなど、レアな被害を得意とする」。

「レアな被害」というのは言い得て妙ですが、もともと旅は好きでした。高校時代から長期休みにはヒッチハイクや自転車でも日本中を回っていて、授業が始まってもなかなか戻ってこない。20代はほとんど旅に明け暮れていました。当時は一人旅でしたが、一人だから誰とでも交われるし、常に誰かが助けてくれた。その後子どもができてからは、火山やジャングルや世界の極貧地域の田舎へ、子どもといっしょに出かけました。これまた子どもをダシに、警戒されることなく誰とでも仲良くなれて、一人旅とはまた違った新しい世界に身を置くことができました。

こんなふうに旅は大好きなのですが、きょうのテーマである「観光」という言葉には、いささか躊躇する部分がありました。というのは、近年、観光という言葉には芳しくないイメージが定着しています。新しい社会のコンセプトを探っていく会議で使うのが適切かどうか？ 迷いましたが、もう一度観光の本来の意味に立ち返って、これからの意義を見つめ直すことが重要だと考えることにした次第です。

「観光」という言葉は、中国の易経にある言葉だそうです。光を観る。光りモノを観る。つまり、すぐれたものに触れることによって、自らを浄化し、力を得るということですね。日本では、平安の昔に修験道の言葉として使われ、役小角のような万能の力を持った人が諸国をまわり、光りモノに触れて、さまざまな不思議な力を発揮した。それがもともとの観光でした。

■観光の大衆化と変質

観光が大衆化したのは江戸時代です。町人文化が華やかになりし頃に、各地の交易が盛んになって、民間信仰に物見遊山気分も加わったお伊勢参りが庶民の間でブームになりました。とはいえ、それは一生に一度あるかないかの旅。物見遊山の観光がごく当たり前になるのは、戦後です。各地に観光協会ができ、宿泊施設や土産物、バスやタクシー会社などが組織化され、エージェン트가誕生し、観光産業を形成していきました。ことに高度成長期以降、消費が美德であり、豊かであることが何より大事であるかのような価値観が蔓延していく中で、観光産業も肥大化していく。かつては東京はおろか、隣村にさえ行ったことがないという人が大多数だったのに、海外旅行も当たり前になり、観光産業によって、一気に世界がつながったわけです。

一方で、観光の大衆化とともに、日本中の観光地では、観光客は旅の恥はかきすて、観光業者のほうは観光客から絞るだけ絞るといような、雑な感覚がベースになってしまった。名所の沿道には毒々しい土産物屋がびっしり並び、そこにたどりつくまでに辟易としてしまい、光りモノに触れる感動はかき消されてしまう。かつては日本中に世界遺産になるような資源がいっぱいあったはずなのに、いまや富士山でさえ二流の観光地と化してしまっている…。いったいなぜ、いつの間に、こんなに観光が変質してしまったんでしょうか？

とはいえ、観光客が減ったわけではありません。一昨年は1700万人が海外へ出かけました。昨年はSARSなどの影響のせいで落ち込みましたが、この夏に海外に出かける人は過去最高です。観光産業は、全世界では3兆6000億ドルにもなる巨大な産業を形成しています。大きなトレンドとしては、観光の世界はまだ大きく伸びていくでしょう。ところが、いま観光産業は斜陽産業です。価格破壊によってドル箱の団体旅行や海外旅行は軒並み赤字。修学旅行などの教育旅行部門さえも赤字にあえいで、エージェンタや旅館がバタバタつぶれている状況です。伸びているのは、個人の自由旅行。従来のお仕着せのバック旅行ではなく、個人の企画や意志による旅へと変化していて、従来型の観光産業は質的な大転換を迫られています。

■新しいツーリズムが続々登場

そんな状況下、新しい時代のツーリズムはどうあるべきか？ 旅行会社も国もこぞって研究を進めており、ことにバブル崩壊以後は、これまで聞いたこともなかったようなツーリズムが続々登場しています。

たとえば、里山などの農山村地域に滞在して体験型の旅をするのが「グリーンツーリズム」。それが農業体験へと発展したのが「アグリツーリズム」、漁村に滞在して漁民とふれあい、船で釣りをするようなものは「ブルーツーリズム」、森林をテーマに林業体験をするのが「フォレストツーリズム」。その土地に滞在し、土地本来の地力に浸りながら健康増進を図るのが「ウェルネスツーリズム」、なんでもかんでもいろいろ魅力を取り込んでいこうというのが沖縄の「ちゃんぶるツーリズム」。「アドベンチャーツーリズム」「ネイチャーツーリズム」などというのもありますね。

こういった言葉の乱立の背景には、省庁のタテ割もからんでいて、たとえば「エコツーリズム」を環境省で使いたすと、国交省は同じ言葉は使わずに、「インタープリターを通じた体験型観光」と呼ぶ、という具合に、各省庁ごとに観光にアプローチしている結果です。でも、それほど観光が重要で、かつさまざまな言い換えなければならないほど観光をめぐる価値観が急速に変化し、まだ落ち着いていないことのあらわれでもあるんですね。

ちなみに海外では「エコツーリズム」「オルタナティブツーリズム」「サスティナブルツーリズム」など、形態ではなく旅の質を表現する言葉を使っています。私自身は、「エコツーリズム」であれ、そのほかの呼び名であれ、めざすべき社会にたどりつくための道具であって、時代にあった言葉であり、使いやすい道具であれば、言葉にこだわる必要はないと考えています。

■エコツーリズムとは何か

さて、観光産業が斜陽化し、「観光」が変質してしまった反省のもと、大量消費型のツーリズムではなく、もっと持続的な、観光が本来持っていたすぐれたものに触れて浄化される、光りモノを見て元気になるといった価値を取り戻そうと誕生したのが「エコツーリズム」です。もっとも定義はまちまちで、私たちも1992年に研究会を立ち上げて、定義をめぐって2年ばかり議論が続きました。1994年から、議論はいったん横において、まず自分たちがやりたいと思う旅をつくってみて、その中で意義を立ち返って考えることにしよう、実際のエコツアーをいくつかやりました。(ここでひとこと補足。「～ツーリズム」というのは考え方で、「～ツアー」というのは、その考えにのっとった旅行形態をさします。)

そこで発見したのは、エコツアーの醍醐味は、大自然や文化との出会いとよく言われるけれど、実際に感動するのは、人との出会いだということでした。

たとえば環境省が平成8年に行った、南西諸島のモニター調査で、旅に出かける前と後に、自然の美しさや食事のおいしさ、施設、アクティビティの魅力や文化などさまざまな項目について魅力度と満足度を測定したところ、ダントツの満足度が、行く前はあまり評価されていなかった「人との出会い」、つまり土地の人やガイドとの出会いだったのです。

これは私たちが自分自身がモニターになって海外のエコツアーに出かけたときも同じで、巨木に涙するということはあまりないけれど、少数民族や、ガイドと抱き合って涙を流して別れを惜しむわけです。人間は人間に対して感動する。旅を提供する側と、受ける側とで、よりよい人間関係を築くことによって成り立つ旅、それに心打たれるのです。この土地はこんな文化をもっているのか、こんな暮らしのルールがあるのか！ たえばボルネオのジャングルで森を宇宙として生きている人々と出会い、衝撃を受ける。でも、私たちがまた自分たちの宇宙を持っていることに気づかされるわけです。そして、まったく異質な世界で、私たちが同じように喜怒哀楽を持つ、同質の人たちがいることに共感するんですね。その土地に友人が生まれると、日本に戻ってきてからも、ボルネオの森が特別な森になります。そういう意味では、エコツーリズムによって世界各地を旅する人が増えるほど、世界には争いがなくなる。観光というのは平和産業でもあるんです。

こうして、人に感動し、訪れた土地に愛着を持つと、自分たちが訪れたことによって、その土地にメリットを生み出したという気持ちが出てきます。自然や文化や、そこで出会い、仲良くなったおじいちゃんやおばあちゃん、子どもたちが、その地域に誇りをもって、より輝いてほしい。その地域が豊かであってほしい。エコツーリズムの定義に、地域貢献とか、地域がエコツーリズムによって活性化するという内容が含まれているのはまさにそこなのです。

○ 日本エコツーリズム協会の定義

エコツーリズムとは、

- (1) 自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること
- (2) 観光によってこれらの資源が損なわれることがないように、適切な管理に基づく保護・保全をはかること
- (3) 地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果を実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする

地域の資源や、そこに住む人たちの暮らしが持続的に維持される仕組みを作り出すためのトライアルとして、ホールアースで導入したのが環境負担金です。1998年に開始して、一人200円と設定したのですが、沖縄ですでに500万円ほどの地域への寄付になりました。また、地域の人たちに、サトウキビを切らせてもらったり、その地方独特の赤米を食べさせてもらう、土地の昔語りをしてもらうというように、サービスを提供したり、ツアーで重要な役割を果たしてもらっています。地元の人たちがツアーにかかわることによって、従来は単に迷惑なだけだった観光客との関係が変化して、交流も生まれています。さらにエコツアーガイドをはじめとした人材育成なども手がけており、たとえば沖縄本島でのエコツアーガイドの9割以上が私たちの講習会の修生で、地域産業にも貢献しています。

■エコツーリズムの課題

こうして少しずつ広がってきたエコツーリズムですが、課題も見えてきました。

この間の経緯を時間軸で見ると、1990年代前半は、エコツーリズムがこれまでの観光でできなかったことを成し遂げてくれるのではないかと期待と夢を語る時代。90年代半ばは、その可能性を実現してみようと、エコツアーを始めた時代。そしてここ4~5年は、北海道から西表まで、日本全国でエコツアーが行われるようになった時代です。

そこでいまあちこちで起きている問題のひとつが、対立の構造です。ガイド(事業者)同士の対立、地域との対立、ガイド(自然体験活動)と自然保護の考えとの対立など、総論から各論に入った段階で一斉に吹き出してきました。ガイドが別のガイドの悪口を観光客にしゃべっている。せっかく来てくれた客に、ここには二度と来たくないという思いにさせているんですね。地域住民とエコツアーガイドの関係でも、悪化しているところでは、自分の子どもだけは絶対にエコツアーガイドにさせたくない、となってしまう。さらには、伝統的な「自然体験と自然保護との対立」がエコツアーでも生まれています。自然はエコツアーの名のもとにさんざんな目に遭っているという批判です。あの厳しい環境管理を行っているガラパゴス諸島でさえも、自然の破壊が進んでいる。

結局、エコツアーというのは魔法の言葉ではなかった。エコツーリズムという手段だけで、人間と社会、あるいは人間と自然の関係がよくなるなんてことはありえないということが、現実のものとしてわかってきたんです。それはもちろん当たり前の話で、今の大量消費社会をそのままにしておいて、エコツアーだけで、持続可能な社会ができるわけがない。

とすると、「マストゥアー」と、「エコツアー」を対立したものとして考えてもダメなんですね。エコツアーだけを特別扱いして厳しい自己管理を課しても、同じ場所がマストゥアーによって荒らされては何にもならない。マストゥアーのニーズは、将来もずっとあるわけですから、マストゥアーのエコ化が必要です。自然の中にくわえタバコが入ったり、バスから降りて缶ビールをポイ捨てる人がいなくなるだけで、ずいぶん違う。ゴミを捨てないことぐらいはだれだってできるわけですから、その効果は少数のエコツアーががんばるよりはるかに大きい。

そして、もうひとつ。エコツーリズムはたしかに社会運動ではあるものの、「武士は食わねど高楊枝」ではダメで、市場原理の中に位置づけて収益を生み出していく必要があるということ。とかくエコを語る人は、市場原理が世の中の悪弊を引き起こしていると糾弾しがちですが、市場原理の世の中で経済効果を生み出す仕組みにしていけないと、社会のさまざまな人が目を向ける時代にはならない。知恵を使って、エコツアーで経済を振興させ、地域を活性化していく必要があるということで、環境の世紀にふさわしい産業創造ですので、これはこのあと大いにディスカッションしていければと思います。ありがとうございました。

Session 広瀬敏通・川嶋直・中西紹一・水野一男・池上博身・村上千里・青木将幸

■Session 1 エコツアーの問題点の背景にあるのは…

青木 まずは、広瀬さんのお話を聞いての感想から行きましょうか。

池上 「観光」という言葉は、もともと光りモノにふれて浄化されたり、力を得るということだというお話をうかがって、なるほど得心しました。というのは、ここにくる新幹線の中で、sightseeingの訳が観光だけれど、「観」は観察の観だが、なぜ「光」なのかとあれこれ考えていたんです。そのとき、90年代初頭にコーポレートシチズンシップの考え方がアメリカから広まった際、企業が社会貢献活動をやる意義は、enlightened self-interestにあるとハーバードビジネスレビュー誌に書いてあったことを思い出しました。これも光に関係するでしょう。直訳すると「啓発された自己利益」。最初はチンプンカンプンでどう訳していいかわからず、経団連などでも、企業市民活動は長期的な投資だというふうに言い換えていたんです。社会貢献活動も、結局は自分の利益につながることにある日突然光があたって気づかされるんだと。

それと同じように観光も、見聞や体験を通して自然の成り立ちや仕組みなど、雲が晴れてパーッと光があたるように気づくのではないかと。考えてみれば、里山の管理とか、人や林や生物多様性にとっても光はとても重要なポイントだし、観光と環境

教育も、光というキーワードでつながりそうだ、そんなふうについて自分なりに納得していたわけなんです。

広瀬さんのお話であらためて、観光の本質を考えさせられましたね。

中西 マス旅行の原型は江戸時代のお伊勢参りですが、実はあのころにだってエージェンต์はいたんですね。地域ごとに伊勢講があって、講で一生懸命お金をためた会員が伊勢にやって来ると、御師が宿の世話や参拝・見物の面倒の一切合切を見てくれる。つまりパック旅行に近い個人旅行だったと思うのですが、では当時の観光と、今のパック旅行と何が違うかを考えてみると、戻ってきてあそこはどうだった、ああだったと体験を話し、共有する場が地域にあるかどうかではないでしょうか。

青木 旅の経験を共有するというのは大事ですね。

中西 もうひとつ感じたのは、レアな自然に触れるのがエコツーリズムぐらいの感覚しかなかったのですが、むしろフィールドワークに近いということ。ことに、人との出会いなんだという部分に共感しました。ほくも昔、民俗学の調査で紀伊半島の南端の村に行き、青年団に入れてもらったりしてお世話になったんですが、今でも台風がああたりに通ると、大丈夫だろうかとか心配になっちゃう。それと、エコツアーでは、行き先の対象について畏敬なり敬意を持つのが、巡礼のようだという印象も持ちました。

水野 ほくがエコツアーという言葉は初めて聞いたのは、農家の主婦たちが農業に行き詰まって、ファミリービジネスの中で農村民宿をやりながら、農業を維持・再生しようという動きが出てきたときで、日本にもそういうものが登場したんだと、とても勇気づけられる気がしたんですね。環境を守りながら地域の産業おこしをするといったイメージを持っていたのですが、それが最近では事業者同士で対立したり、地域で分裂を引き起こしたりしているケースがあるというのはちょっとショックですね。

村上 中西さんの巡礼という発言で思い出したんですが、巡礼というとメッカですよ。一生に一度はメッカに行かなければということがイスラムの教典に書いてあるそうなんです。これには、世界各地から信者がメッカを訪れることで、大きな宗教だとわからせる権威付けの意味があると同時に、いろいろな文化や言葉話す人たちが一つの宗教でつながっているという連帯感を持つ仕組みだということを知っています。

エコツアーの魅力が人との出会いということと言えますと、訪れた地域の人だけでなく、同じツアーに参加した人同士の出会いも重要ですね。以前、西表にマングローブを植えに行こうというエコツアーの真似事の企画をしたときに、新聞に小さな広告を出しただけなのに申し込みが殺到したことがあります。そういうメッセージに反応する人たちだから、参加者同士で話すのもおもしろい。そんな出会いが旅の醍醐味ではないでしょうか。

ここで質問なんです。エコツアーで参加者から集めた環境負担金をどのように活用しているのか、それと、地域住民とエコツアーガイドが対立することがあるということですが、いったい何が原因なのでしょう？

広瀬 環境負担金については、その地域を訪れた人×200円で徴収しており、200円というのはプログラム料金の1割ということで設定したんです。参加したツアーリストにとっては、体験に参加することによって、その土地に直接お金が落ちるという実感がある。事業者にとっては、自分の活動のフィールドとしている地域に対するお礼の意味があって、1人あたりでは200円と少額ですが、トータルにすると年間では何十万円にもなります。

トライアルとして沖縄の7カ所のフィールドに対して設定したのですが、参加者の了解を得るのは、さほど抵抗感はありませんでした。プログラム費1800円に対して負担金200円、計2000円と、リーズナブルな金額だったこともあるんでしょう。

ただ、エージェンต์にとっては抵抗感が強かった。200円に対してもマージンが発生するかどうかとか激論になりました。プログラム費と環境負担金を別々に銀行振込すると、それぞれに手数料がかかるわけですね。

もうひとつの問題は、集まったお金をどうするかです。受け取り先は、商工会とか公園管理事務所、自治会ですが、最初3~4年は使途を制限せず、相手に任せました。植林に使おうが、備品を買おうが、お祭りや地域の寄り合いで使おうが、ヒアリングはしましたが、制限はしなかった。

その後2カ所の地域では、ホールアースからだけでなく、他の事業者からもそのフィールドに入るための入場料として負担金を徴収するようになりました。するとその管理人は、環境負担金だけで生活が成り立つほどの収入になるんです。でも万々歳ではなくて、批判がわき起こった。ホールアースが勝手に始めたことに対して、どうして関係ない者までお金を取られるのか、冗談じゃない。もうひとつは、環境負担金といいながら飲み会に使われているじゃないかという批判です。

最初の批判については、強制ではなく、地域のそれぞれの考え方でやってほしいと話をしました。飲み会に使われているという問題については、ほく自身はゆんたく（沖縄方言で、寄り合って飲み親睦を交わすこと）自体の価値を認めているのですが、とりわけて使い道が無いという4カ所の地域で「がじゅまる自然基金」としてプールして、NGOやNPOに基金を出す形にシフトしました。

質問の第2点の、エコツアーガイドと地域との対立というのは、いささか根が深い問題ではあるんです。ガイドになるには、何の資格もいりませんし、花卉やイモなどの換金作物をつくるより、ずっと簡単にお金になってしまう。「ポッと来て、ポッと看板を立てただけで」自分たちが汗水たらすよりも多くのお金を稼いでいる。地域の人にとってみると、先祖伝来の森や自然を商売に稼ぐとんでもない奴らというわけですね。もちろん、その人なりに研究したり、そこに通いながら学びを深めてきたわけで、必ずしもポッとやって来たわけではないんですが、ヨソから来てガイドになる人が多いのは事実なんです。ガイドのほうにも屈折した感情があります。国家資格を持っているわけではないし、さほど地元貢献しているわけではない。一方、観光客に対しては、そこの出身者の顔をしてほしい…。新しい産業が起きる際には避けられない不整備な状況や理解の食い違いがあると思います。

川嶋 ただ、外の人でないと、そこの土地の魅力に気づかないということもありますよね。地域おこしだってそうでしょう。「風の人」と「土の人」が必要なわけ。エコツアーガイドの場合、地域おこしの風の人役割よりは、アツという間に時流に乗って稼いでしまうところがあるから、摩擦も大きくなる。

広瀬 地域によっては、地元出身でなければエコツアーガイドになってはならない、としているところもあるんです。だから隣の地区から客を連れてくるのもまかりならんという…。これも弱った問題です。たしかにその地域の資源で儲ける以上、利益を地域に還元してほしいという要求は正当だとは思いますが、でもそこで語られる地域は、生活圈なのか、文化圏なのか、行政圏なのか？ 行政的には村とか町の範囲は固定されますが、エコツアーのプログラムは行政圏を単位としてやるわけではありません。文化や生活、自然、何をテーマにするかによってどこまでをその地域と見るかは違ってきます。

もっと考えなくてはならない点は、地域というのは、その資源と関わり、そこで生きる人々によって、そしてそこを訪れる人たちとの交流・衝突によって変化していくということ。それが地域のエネルギーとなり、ダイナミズムを生むんです。

刺激を吸収して新しい地域の資源をつくっていかねばならないときに、外との交流対流を拒絶してしまうと、地域の資源が固定化してしまう。出会いを拒絶するのではなく、「風の人」を受け入れる度量が必要なわけで、そういう地域はまだ少ないですね。

■Session2 プログラム開発のポイント

青木 「風の人」と「土の人」という話が出ましたが、エコツアーを企画したり、環境教育のプログラムをつくるのは、往々にし

てヨソ者である「風の人」です。ホールアースでは、地元の人にどのように受け入れてもらい、プログラムを開発しているんでしょう？

広瀬 「緑側理論」というのをご存知でしょうか。日本中どこかの田舎に行っても、緑側に腰かけさせてくれてお茶を出してくれる。でもそれに甘えて座敷まで入ろうとしても、奥には入れてもらえない。緑側は外と内とのバッファゾーンなんですね。緑側より奥に入るには、身内になるか、友人になるしかないんです。ではいかにして仲間と認めてもらうか？ それは地域の人に徹底的に教えるを乞うことなんです。畑の耕し方、種の蒔き方、どんなところでどんな楽しみがあるか。暮らしのすべてにわたって教わる。誰も教えることは嫌いではありません。それどころか、教えてくれた相手は、自分の仲間として弟分なり子分として面倒を見てくれます。緑側というハードルを超えて初めて、エコツーリズムなりグリーンツーリズムを担う主体になることができるわけです。

青木 プログラムを開発するポイントはどこですか。

広瀬 その土地の人にとってはありふれていて見えないけれど、その土地の魅力に気づき、新鮮に感じるのはヨソの人という構図ですが、一方でその土地のことをいちばんよく知っているのは、やはり土地の人なんです。ヨソの人は、プログラムの企画・デザイン者として、地元の人々の知恵や技術を引っ張り出す必要があります。子どもに作った道具や遊びは？ その人のおじいちゃんやおばあちゃんは、どんな暮らしや生き方をしていたのか？ 目の前にある事実だけがプログラムの素材ではなく、その背後を探っていくと、共通の普遍的な価値にたどりつく。それが昔からの生きる知恵だったりするわけです。それを発見することが重要です。

青木 さきほど地域のダイナミズムの話が出ました。地域の資源を探っていく過程で、その地域の人はずっとましく思っているのに、ヨソの人はありがたがるケースもあるかもしれない。そんなときに、それをプログラムにしようという、資源の固定化につながってしまうのではないですか。

広瀬 それは固定化ではないんです。たとえば棚田がありますね。耕作を続けるのはとてもしんどい。それを昔通りに米を作ってくださいというだけでは、だれも作りません。ところが、棚田倶楽部のような、都市で暮らす人が棚田のファンクラブを作って、オーナーとなって棚田の農作業を手伝う試みがありますが、たとえ実際に作業に来るのが年に数日でも、棚田米をおいしいと言って食べてくれる人がいて、手紙などでの交流があると、棚田を守る人にとっては、それが生きがいであり、パワーにつながるんです。それは資源の固定化ではなく、新しいムーブメントも盛り込んだ棚田の復活。伝統芸能や祭りもそうです。すばらしいと誉める人、支持する人が出てくれば、誇りが生まれ、やろうという人が必ず出てくる。

中西 海外から研究者がやってくると、「こんな遠い外国に、何がおもしろくてやってくるのかねえ」なんて言いながら、誇らしくてたまらない。自分たちのやっていることが価値あることだということに気づくわけです。

広瀬 静岡の南アルプスでエコツーリズムの仕組みづくりに関わっていますが、エコツーリストが来る日を夢見て、日々研鑽に励んでいるだけだと疲れてしまうんです。それが都会から若い女の子がやってきて、「きゃー、おじさん、こんなことできるなんてすごい！」と感動されると、その一言で絶大な効果がある。

川嶋 外からの視点が鏡になるんですね。

水野 いま川嶋さんから、外からの視点が自分たちを照らす鏡になるというキーワードが出ましたが、ここで訪れる側の視点に注目してみると、マストツーリズムとエコツーリズムを比較した場合、そこに参加する側のツーリストが、単に触発されたり、刺激を受けたり快楽を求めただけでは、浪費するかどうかの違いはあっても視点は同じですよ。ツーリストが収奪したり、恩恵をこうむるだけでなく、訪れた人がその地域と、協働、共有することによって、何か創造的なものを生み出していく。その地域のメリットになったり、活力を生み出していくようなプログラムが求められていると思います。

青木 なるほど。ではこのあたりで、そういった活力を地域に生み出していくためにどうしたらいいか。里山の観光資源や環境教育について考えていきましょうか。

広瀬 いま多くの里山で農業の未来が見えませんね。若い人にも職がない。でも、ここに都市の人がやってきて、農村の営みのファンになってくれる人が増えれば、いろいろな意味で里山が活性化していくはずですよ。ここで注目したいのは中高年の存在です。数年前に農文協の『定年帰農』という雑誌が一気に6万部売れる事件がありました。会社をリタイアした20万人ほどの人が、農村の土地を求めて田舎へ行くというムーブメントが出てきたわけですが、これは何を意味するのでしょうか？ 今の中高年は田舎に暮らした原体験を持っているけれど、そんな原体験を持つ人の心を癒す力が里山にはあるんです。

日本旅行業協会の調査では、「自然に親しむ旅行に行きたい」とする中高年が80%、「知的好奇心を満たす体験をしたい」という中高年は90%もいます。ところが、日本環境教育フォーラムが調べた自然体験学校の調査では、中高年対象のプログラムがあるのはわずか3%、今後やりたいかという意向もわずか3.3%。エコツアーなどの自然体験活動に参加したいという中高年がこんなにも多いのに、受け皿がまったく不足しているわけです。

川嶋 市場と商品のアンバランスはこれに限ったことではないんですが、自然体験プログラムのターゲットというといつ子ども。施設的にも中高年を満足させるレベルのものが少ないでしょう。

広瀬 今のエコツアーや自然学校の担い手の多くが新しい産業を反映して若い人が多いんです。かれらは、子どものニーズは汲めるんですが、自分の上の世代については未経験なので接点の持ち方が苦手なんです。だからもっと、中年の企画者が必要ですね。

中西 中高年に、もうひとつの自分がコミットできるふるさとを持つというアプローチですね。観光をコミュニケーションの回路として活用していくことも大切です。

■Session3 エコツーリズムは、観光をきっかけにした地域振興総合産業だ

青木 里山でのエコツーリズムや環境教育のプログラムについて考えていきたいのですが、まずはホールアース自然学校がどんなプログラムを提供し、環境教育のチャレンジを行ってきたかについて、広瀬さんから紹介していただきましょう。

広瀬 ホールアース自然学校が本拠地としているのは、富士山のふもと静岡県富士郡芝川町。広々とした田と畑と川が広がり、裏山があるという、まさに里山のイメージそのままの場所です。ここでは若い人は都会に出てしまい、高校生までの子どもか、おじいちゃんおばあちゃんという年齢構成で、20代～30代に出会うと、十中八九、ホールアースのスタッフという具合です。1982年に活動を開始してざっと25年になりますが、それまで他所の人との交流がほとんどなかった地域の人たちにとって、ホールアースの存在は大きかったと思います。村おこしに力を入れても、年に一度の祭りで盛り上がるだけでそのほかの季節は閑散としてしまうというのが一般的ですが、自然学校でさまざまなプログラムを提供していることによって、毎週のように多くの人がこの地域を訪れます。

たとえば、田んぼの学校の全国研修会が行われると、北海道から九州まで参加者がいるのですが、夜になるとそれぞれ一升瓶をもちよっての利き酒大会になる。すると参加者が、自然学校のある地元の柚野(芝川町)の酒がいちばんうまい、と誉めてくれるんですね。それが地元の人にとってはとてもうれしい。つまり、よその人からの評価が鏡になって、ふだん知ることのない自分たちの姿がわかるのです。

自然学校では、地元の方たちにプログラムを手伝ってもらっています。作物や木の性質を教わったり、竹細工を教えてもらったり。地域の名人をたくさん発掘して、多くのプログラムが誕生しました。竹細工づくりなど、セミプロになる人も出ています。一方でトラブルもあります。そういったプログラムを指導してくれる方に指導料をお支払いしているのですが、担当スタッフが一律いくらの単価だからとお金を渡そうとしたところ、「自分は子どもたちが喜んでくれるのがうれしいから田んぼの話をしているのに、そんなことなら手伝わない」とおっしゃる方がいた。田舎には「結い」の考え方があって、沖縄では「ゆいまーる」ですが、たとえば家の解体をするとき総出で手伝いをする。とくに日当が支払われるわけではなく、今度は建て前があるとなると、逆に手伝いをしてお返しをする。そういう共同体の相互扶助的な考え方があるのに、お前たちは金で返すのか、というわけです。ぼくたちはお金に頼らない新しい価値を作ろうと自然学校をやっているのに、いつの間にかお金に価値を置いてなんでも動かそうとしていたと反省をして、地域通貨的なものをつくろうと、いま準備を進めているところです。

自然学校でさまざまなプログラムを展開していますが、地元の人は100年前のことを昨日のこのように語ってくれたりして、とてもかなわない。ぼくたちは全国の情報を持っているけれど、地元の人がよく知っていることは実にたくさんあります。それを一方的にプログラムをつくる立場でやると、その土地の資源力を活用できない失敗も出てくるでしょう。やはり、その土地の人から教わるのがいい。

ホールアース自然学校には、沖縄も含めて年間6万人のプログラムの参加者がいますが、数としては富士山地域が一番多いんです。参加者からはプログラム費だけを得られているわけですが、参加費以外に、全国各地から集まった人たちが泊まったり、食べたりお土産を買ったりで、ホールアース効果が8億円だそうです。ある試算によるとホールアースのプログラムへの支出費は、観光客が落とす金の2%で、もしぼくらがホテルを経営したら一人勝ちになっていたでしょう。自分たちだけで収益をひとりじめしてしまう。たった2%に甘んじているからこそ、地域と自然学校の関係が良好に保たれているのだと思います。

さて、里山地域におけるエコツーリズムを考える場合、もしエコツーリズムには原生自然との出会いが欠かせない条件だとしたら、日本の里山は当てはまりません。でも、南西諸島の環境省のデータを見ても、たとえ原生自然に出かけても、私たちが感動するのは人に対してでした。とすると、人間が何百年もかけて自然とおりあいをつけて維持してきた里山という自然は、大きな魅力があるといえると思います。人が関わってきたことが重要で、かつての失われた里山は、魅力的な資源にはなりえません。とすると、今後も里山とかかわりを持ち続ける人をどうつくっていくか？ 里山地域で観光を生み出す人材を育て、そういった人との出会いを求めてやってくる人を受け入れるシステムをつくるのが何よりも求められているといえるでしょう。

そのための仕掛け人も含めて、いま里山は圧倒的に人材不足です。いかに里山の魅力を生み出していか、里山を輝かせることができるか。その里山地域の資源となる生きる知恵を持った人と、都会の人をつなぐコーディネーターの役割も大切です。ぼく自身は日本中の小学校にPTA活動の一環として自然学校ができるのが理想だと考えています。その校区全体で、コーディネートできるプロが一人いるといいですね。

川嶋 日本環境教育フォーラムで、自然学校は何のためにあるのかと議論したことがあるんです。ひとことで言うと地域振興としての自然学校。何も無い地域を魅力的にするのが、自然学校であり、プログラムなんです。自然や文化や歴史や人という素材を、体験や学びのプログラムにしていく。エコツーリズムの観光も似たようなもので、濃度が濃いと自然学校で、薄いものが体験型の観光ということでしょうね。

これまで観光というと、エージェントやホテルなどの「観光業」だけが地域から切り離されて歪んだ形になっていたけれど、エコツーリズムをきっかけにして、観光を切り口にした地域振興総合産業をめざす。農業や文化や教育やいろいろなものが関連しあって、地域循環型の暮らしを創出していく、それがポイントだと思います。

水野 総合産業といった場合、その主体がどこにあるのか。自然学校なのか、役所の振興課なのか。主体もくっつけないと、動かないことがあります。

川嶋 主体はひとつじゃないんですよ。

広瀬 すべてを自然学校が担うと、その地域にそれにかかわる人とかかわらない人が生まれてしまう。そうではなく、農業も文化も芸能も教育も企業も、それぞれが観光の資源としてさまざまに関与していくことが大切でしょうね。

村上 スーパーマーケットができて、地域の商店街がつぶれちゃったというのとは逆に、それぞれ個性のある商店が地域あって、お互いの専門性で相乗効果をプロデュースしていくというイメージかな。いまはその専門性が寂れていってるんですね。

広瀬 ツーリストだけがお金を落とすわけではないんです。ツーリストの財布なんてタカが知れている。地域の人同士がお互いにお金を落としあう関係が生まれて初めて、地域全体が経済的にうおっていくのであって、ツーリストが来たことによって、いろいろな人たちが流動化して行って、いろいろなものに価値が生まれ、地域通貨も含めて貨幣の交換がおこると活性化していく。

中西 日本の里山のような中山間地域って、世界的に見ても少ないでしょう。いま途上国も含めて、世界的に人口の都市集中が起きていますが、こういう自然と関わって人が生きて活性化していくプログラムを、インターネットなどを使って世界に向けて発信していくことも、非常に意味のあることだと思います。

広瀬 田舎から都市へ人口が流入し、里山が徹底的に寂れ、深刻な環境問題を引き起こしているわけですが、その人たちをもう一度里山に呼び戻す。それにエコツーリズムをはじめとした環境産業が担う役割は大きいということですね。

青木 エコツーリズムをきっかけに、都市化と過疎化とは逆の流れを、世界レベルでつくっていく。最後は大きな話になりましたね。今日ぼくが考えたのは、観光の光というのはすばらしいものを感じるということですが、「観光」は実は「感光」でもあって、光をすばらしいと感じ取れるようにしていくことが大切だということ。そこに教育の意味もエコツーリズムの意義もあるんですね。

Notes ディスカッションを終えて

エコツーリズム、ESD、環境教育 川嶋直

今日は観光という言葉に新しい息吹が与えられました。「光」という言葉や、「鏡」というキーワードが出てきましたが、「風の人」と呼ばれる、その地域に新たにやってきた人が鏡になることもあれば、旅行者自身が鏡になることもあります。自然学校のような組織や、コーディネーターのような人材がいなくても、みんながそういう目で何も無い地域に遊びに行って、鏡としての役割を果たしてそこを通りすぎていくということもあるでしょう。いまかつてないほど、都市の人間が田舎に移り住んでいます。もちろん数としては田舎から都会へという人が圧倒的に多いけれど、引き算ではなくて、単純に田舎にやってくる数だけを見るとおそらく増えている。農業だけでなく、宿をやったり、芸術家だったりといういろいろですが、そういう人たちが、地域の資源を発見する鏡になるといいですね。

ところで、キープ協会の年間の売上げを見ると、教育プログラムによる収入よりも、観光事業による収入の方が圧倒的に多いんですが、ぼくとしては観光と教育の境目をなくしていきたいんです。最近のはやり言葉にESD(Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育)というのがありますが、エコのもりセミナーもまさに持続可能な社会づくりのための教育をしようということ。本日のお題のエコツーリズムも、観光をきっかけにした「地域振興総合産業」であって、そこで

教育の果たす役割がとても重要です。「観光をきっかけにした地域振興総合産業」なんてちょっと長すぎるかな。ひとことで意義が伝わって、パンチがあって、新しいオルタナティブを提案できるような、エコツーリズムにかわる言葉があるといいですね。

新しいおみやげの開発を！ 水野一男

人間はモノを生み出したり、つくったりすることで癒されます。エコツーリズムにもそんな響きを感じます。都市と里山の交流を考えた場合、単に交流するだけではなくて、観光客の視点や関わり方が非常に重要ですが、観光を媒介にすることで、新しい資源を活用したり、人的資源の供給の仕組みができます。その可能性に注目したいと思います。里山というフィールドは、観光客が地元の人とともに、自然に働きかけることによって創造性が発揮できる、癒しや創造力の源なんですね。

きょうはあまり議論できませんでしたが、おみやげについても注目したい。みやげを漢字で書くと「土産」で、その基盤となるのは土ですが、土をつくるというのは長期的な視点に立った投資です。そこが人との関わりによって活力を増して、新しいものが生み出されていく。それこそが土産＝みやげで、土地利用にもかかった新しいおみやげを開発していくことが、地域おこしもからんで大切だと思います。エコツーリズムがそんな新しい土産の起爆剤になることを期待したいですね。

里山の知恵を戦略的に集積した学びの場に！ 中西紹一

里山を自然体験の場としてだけでなく、知的好奇心を満たすステージとして位置づけると、さらにいろいろなプログラムが考えられると思います。さきほど地域振興としての自然学校という話が出ましたが、地元の知恵を自然学校が収集していくと、そこが地元の知恵の蓄積場所になっていく。知恵というのは往々にして文書化されて残っていたりはしませんが、情報を集積する機能を自然学校に戦略的に入れていって、次の世代にどう活かしていくかを考える。それこそ総合産業ですよ。自然学校は観光ではなくて留学であり、知的満足を得る学びの場なんです。そういう情報を発信していくことで、エコツーリズムがレアな自然を見ることとはひと味違った、カウンターカルチャーになっていくのではないのでしょうか。

光とるおい 青木将幸

観光とは光かがやくすばらしいものを、体にあびて、自らも浄化されるということ。とてもすばらしい語源だと思いました。地域にはいろいろな宝がありますが、それを見つけ、みがき光らせる人が必要。この作業には地元の人と、ヨソモノの両方に役割がありそうです。

宝物をめだたせようとして、あまりに強いスポットライトをあびせると、宝自体が死んでしまったり、しおれてしまうこともあるのが観光の難しいところ。そういう意味では、よき観光地でありつづけることの条件は持続可能であることなのだと思います。

同時に、観光はうるおいをもたらすものだと感じました。訪れる人の心にもうるおい、地元で働く人にもうるおいを、関わる業者にも少しずつのうるおいを分け合ってゆくことが大切なのでしょう。地元ですばらしい宝があって、これを地元の人だけの秘密にしていると観光にはならない。しかし、その宝物を旅行業者だけが独占してもいけない。その地域にあるすばらしいうるおいを独占することではなく、うるおいを分かち合ってゆくことが観光なのだと思います。

自分が観光客になるときは、「3泊4日で3万円は安い！」などのような支払う側の金銭の視点だけでなく、そのうるおいの行く末をみすえた行動をとりたいものです。